松本市文化財調査報告　No.42

推定信濃国府

― 第四次調査報告書 ―

1986・3

松本市教育委員会

推定信濃国府

— 第四次調査報告書 —

1986・3

松本市教育委員会

序

推定信濃国府の発掘調査は4年目ですが、本年も的確な遺構に当たらぬままに終わりました。しかし、これらの調査にあたっては、前年度にひきつづいて木下　良・山中敏史・桐原　健先生の三先生に御指導いただき、現在開発の進みつつある横田周辺と山辺中学校改築工事現場の体育館建設場所を調査いたしました。

その結果は後述のとうりであり、ひとつの記録になったことは確かではありますが、未だに暗中模索の状態であり、ここ数年の松本周辺の発掘調査結果をもう一度見直して、改めて考え直すことも必要かとも感じております。

結果はともかくとして、御指導いただきました先生がた、発掘、整理と御協力いただきました調査員・作業員の方々のお蔭により、ここに報告書の刊行をみるにいたりました。あつく御礼申し上げるとともに本書が何らかの形でお役にたてれば幸いに存じます。

昭和61年3月

松本市教育長　中　島　俊　彦

例　　言

1．本書は昭和60年７月６日から60年12月19日にかけて行われた、重要遺跡推定信濃国府第四次発掘調査報告書である。

2．本調査は信濃国府確認緊急調査として、国庫・県費補助を受けておこなったものである。

3．本調査の横田地籍調査では、土地所有者、吉田明久、朝倉忠兵氏の御理解、御協力をいただいた。記して謝意を表する。

4．本調査には木下 良、山中敏史、桐原　健先生に御指導いただいた。記して謝意を表する。

5．本書の執筆、編集は専ら神沢が行い、実測、トレース、図整理は向山かほる、土橋久子がおこなった。

6．出土遺物及び図類は松本市立考古博物館が保管している。

目　　次

序

例言

目次

第１章　発掘調査に至る経過

　第１節　今までの調査の概要と今回調査に至る経過……1

　第２節　調査体制……2

　第３節　調査日誌……3

第２章　遺跡の環境

　第１節　自然的環境……5

　第２節　周辺遺跡……5

第３章　発掘調査

　第１節　調査の概要……7

　第２節　山辺中学校敷地（下原遺跡）……7

　第３節　下の丁地籍……10

第４章　結び……18

第１章　発掘調査に至る経過

第１節　今までの調査の概要と今回調査に至る経過

昭和56年12月に市道開発に先立つ発掘調査が行われ、弥生時代後期の生活面と明治時代前後のものと思われる暗渠排水の石の列を検出した。この場所は惣社伊和神社の西北約 200 m あまりの位置にあり、国府に関わる地名の惣社に近いことから、何らかの遺構に当たれば良いがと期待された所である。この後昭和57年度より国の補助事業として本格的に国府調査に着手したのである。

昭和57・58年度の第１・２次調査は、56年調査地点のすぐ西側、伊和神社寄りの農林水産省蚕糸試験場中部試場の桑園を発掘調査させていただいた。その結果は６軒の平安時代の竪穴住居跡とU字型の溝、ピット群などとともに、石群の広がっているのが検出された。しかし、この石群は自然か人為的か疑問の残ったままである。この発掘調査のほか、周辺地域を細かく表面採集して歩いた。その結果は惣社伊和神社を拠点として見た場合、西側は町並みが続いていることと、西傾して河川の氾濫原の中心に向かうことなどから、比較的遺跡は少なく、南方向は南西側に弥生時代の集落があり、それより東に平安時代を主とした集落が続いている。東方向では山辺谷につながる東接する下原遺跡をはじめ、奈良・平安時代の遺構が多い。北方向では山際から現在の集落にかけて縄文・平安時代の遺構がかなりの密度で続いている。こうしてみると伊和神社はむしろ遺構群の西端に近い位置にあることになる。また伊和神社東の南北に走る道の、北東の約500 m 四方は、ずれてはいるが、６分割された桝目の道があることも指摘された。

これらを総括して見ると、奈良時代末か平安時代初めから鎌倉時代初めまでの間存在したと言われる、国府を裏付ける遺構は見当たらず、今後の調査に期待するしかないといえよう。

今回の調査は、前３回の調査結果をもととしたが、開発による緊急調査の要もあって、昨年に引き続いて、下原遺跡に含まれる山辺中学校敷地内の調査と、57・58年度調査した桑畑の北西 500 m あまりの、湯川を隔てた下の丁地籍を調査することとした。下の丁地籍の発掘地は畑であるが、周辺は宅地造成がすすみ、人家が増えつつあるところである。ここは下の丁の字地名にしめされるように国府の中心に対する「下」の町ではないかとの考えにたって、住宅の下にならないうちに調査をしておこうとしたものである。

本調査は総額 100 万円で、そのうち国から50％、県から15％の補助を得、残り35％は市の負担である。各種届け出、通知書類は次のとうりである。

昭和60年1月7日　昭和60年度文化財関係補助事業計画書提出
4月5日　昭和60年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡
4月24日　同　交付申請書（国庫）提出
4月24日　昭和60年度文化財保護事業補助金交付申請書（県費）提出
6月17日　昭和60年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金交付決定（国庫）通知
6月26日　信濃国府確認緊急調査について通知提出
7月25日　昭和60年度文化財保護事業補助金交付決定（県費）通知
12月27日　埋蔵文化財拾得物届・同保管証提出
61年3月3日　埋蔵物の文化財認定について通知

第2節　調査体制

指導者	木下　良	国学院大学教授	
	山中敏史	奈良国立文化財研究所主任研究官	
	桐原　健	長野県教育委員会専門主事（県史刊行会）	
調査団長	中島俊彦	松本市教育委員会教育長	
調査担当者	神沢昌二郎	同　文化係長	日本考古学協会員
調査員	西沢寿晃	信州大学医学部助手	同
	三村　肇	会社員	長野県考古学会員
	山越正義	生坂中学校教諭	同
	横田作重	農業	同
	森　義直	大町高校教諭	

事務局　浜　憲幸（社会教育課長）神沢昌二郎（文化係長）岩淵世紀（係長）柳沢忠博、熊谷康治、直井雅尚（主事）

協力者　三村竜一、高野昌英、向山かほる、土橋久子、滝沢智恵子、前田良平、西原明子、西原三千代、西原いさ子、竹内すゑ子、荻上苗子、近藤　泉、牟礼優子、松原方子、瀬川長広、大出六郎、三沢元太郎

第3節　調査日誌

60．7．6（土）晴　山辺中学校新校舎建設地点をブルドーザーにより掘削。北校舎西側寄り1m下げる。地山は黄褐色土の砂礫層。東側へ地山が高くなっている。遺物なし。

参加者　市教委神沢。

7．8（月）小雨　南側、体育館建設地床掘。全面－80cm。南東消火栓用給水管壊す。そのすぐ東側で－45cmで焼土あり。土師器甕破片あり。一部分床面落ち込み判明。その反対側で遺物包含層あり。　参加者　三村　肇、神沢。

7．9（火）曇、晴　表土（黒色土）分を一回剝いで遺構の有無を確かめ、あと－80cmまで掘る。高野君午前中顔を出す。　参加者　神沢。

7．10（水）薄曇、雨　東側を第1号住居址とする。1住を掘る。山辺中学校横山先生と打ち合わせ、生徒に発掘現場で説明と実際の発掘作業を体験させる。午前中3時間3クラス、午後2時間3クラスが参加。生徒が多すぎて仕事が混乱する。後少し遺構を整える。5時近く雨のため中断する。　参加者　神沢。

7．11（木）小雨、晴　カマド址を中心として掘る。カマド址内に須恵器片あり。出土遺物やや少ない。午後横山先生引率で社会科クラブ生徒20名程作業に来る。作業は5人位ずつにし、他の生徒には考古学や測量等の説明をする。

参加者　神沢、滝沢智恵子、向山かほる、土橋久子。

7．12（金）曇、小雨、曇　第1住掘下げ。攪乱部分わかる。カマドは当初思っていたものより1本南で、そこに石の抜かれたあとがあり、その間に多量の焼土があった。カマドを縦、横に切って、平板測量、部分拡大図をとって終わりとする。

参加者　神沢、滝沢。見学者　横山先生、三村　肇氏。

11．9（土）曇　横田町下の丁吉田明久氏畑を発掘調査開始。開始に先立ち推定信濃国府について概略説明。作業員により手掘り作業開始。3×3mのグリットを20G設定。1、2Gを掘る。ともに－40cmで砂利層が出る。

参加者　横田作重、竹内すゑ子、松原方子、西原三千代、前田良平、太田富貴子、神沢。

11．11（月）晴　2Gを埋め、北側の3Gを掘る。1G部分的に掘下げ。1G西側セクション図とる。　参加者　横田、太田、竹内、前田、近藤　泉、神沢。

11．13（水）曇　14G、19G掘下げ。14G－110cmの砂利層よりかんざし出土。3G北、1～3G西、1G東壁セクション取り。　参加者　横田、西原三、竹内、西原明子、神沢。

11．14（木）晴、風寒し　12G、17G掘りはじめ。8G、14G、19G掘下げ。19G－110cmの黒褐色土で土器小破片出土。

参加者　横田、前田、竹内、西原明、近藤、西原三、荻上苗子、神沢。

11．15（金）曇、薄陽　1G、8G掘下げ続行。11G、16G表土除去。14G、19Gセクション取り。　参加者　横田、近藤、西原三、西原明、竹内、荻上、神沢。

11．16（土）曇　1G掘下げ、－130cmで土師器小片出土。周辺地域の調査。特に水道工事箇所を中心に歩く。

参加者　横田、三村、森　義直、竹内、西原三、西原明、西原いさ子、神沢。

11．18（月）薄曇　1G掘下げ。19G溝上列石、カワラ測図。

参加者　横田、西沢寿晃、西原三、西原明、西原い、荻上、竹内、松原、神沢。

11．19（火）快晴　1G、3G、8G掘下げ。

参加者　横田、松原、竹内、荻上、西原三、西原明、西原い、前田、神沢。

11．20（水）晴　1Gセクション図を取ったあと、埋め戻し。

参加者　横田、松原、竹内、西原明、西原い、荻上、神沢。

11．21（木）快晴　1G埋め戻し。8G土器取り上げ。

参加者　横田、松原、竹内、西原明、西原い、荻上、神沢。

11．22（金）　3G、8G、19G埋め戻し。

参加者　横田、竹内、西原三、西原明、西原い、荻上、神沢。

11．25（月）薄曇、後晴　13G、18G掘り込み。

参加者　横田、竹内、西原三、西原明、西原い、荻上、神沢。

11．26（火）晴　11G、13G、16G掘り下げ。20G平面図取る。　参加者　横田、竹内、西原三、西原明、西原い、荻上、瀬川長広、三沢元太郎、牟礼優子、神沢。

11．27（水）晴　11G、16G掘り下げ。11G土師器小片出る。

参加者　横田、竹内、西原三、西原明、西原い、荻上、瀬川、三沢、大出六郎、神沢。

11．28（木）雨　テント内にて図面、遺物整理。　参加者　横田、瀬川、神沢。

11．29（金）曇　11G、16G掘り下げ。1G、2G埋め戻し。18G溝測図。

参加者　横田、竹内、西原明、西原い、荻上、瀬川、三沢、大出、神沢。

11．30（土）薄曇　全体の埋め戻し作業。

参加者　横田、竹内、西原三、西原明、西原い、荻上、瀬川、三沢、大出、神沢。

12．2（月）曇、時々雨　耕運機にて畑に戻すための土ならし。　参加者　横田、神沢。

12．4（水）曇　機材、テント撤収。　参加者　瀬川、三沢、大出、神沢。

12．19（木）晴　全体図平板測量。元町三角点より標高計り出し。　参加者　神沢、滝沢。

以下　整理作業、報告書作成、現地指導を行う。

第2章　遺跡の環境

第1節　自然的環境

今回の調査地点は2箇所であるが、いずれも松本市の東部に位置している。山辺中学校敷地（下原遺跡）は、東側に連なる筑摩山地の三峰山、美ヶ原付近から発する薄川の右岸にあり、標高650mあまりで、西に傾斜する畑地を中心とする地域であるが、最近は住宅地化が続いている。畑周辺にはヤッコ又はヤツカと呼ばれる石の山が各所にあるが、これは薄川の氾濫によって運ばれた石である。この石は薄川の上流で内村累層を浸食しているため、緑色凝灰岩、石英閃緑岩、ヒン岩、安山岩などの石が多い。

下の丁遺跡は山辺中学校より、直線で約800m北西にあり、東側の三才山付近に源を発する女鳥羽川の影響と、すぐ横を流れる湯川の影響を直に受けている。標高は602mあまりで湯川から水をひいて水田が開けている。湯川は細い川ではあるが、土砂の堆積が多く天井川となっている。ここも宅地化が進み水田が少なくなっている。地層は耕作土、溶脱層の下は砂礫層があり、浅いところでは60cm内外で砂礫がでてくる。

第2節　周辺遺跡

周辺遺跡については、第1次から第3次までの報告書に記述されているので割愛し、3次以降に遺物の発見されたもののみ記すこととする。

1．横田県住東職員住宅付近の下水道工事により、1.2mあたりの黒色土層より弥生中期後半の土器片出土。

2．大村39、40番地の酒井氏畑に防火用水槽設置の際、－70～80cmで焼土があり、布目瓦片、土師器片、須恵器坏片など出土。

3．大村358番地の中野氏葡萄畑南で暗渠排水管敷設の際、－40cmの黒色層より、土師器、須恵器片、フイゴの口が出土。

第１図　位置図

Ａ：山辺中学校敷地　Ｂ：下の丁地籍

第3章　発掘調査

第1節　調査の概要

本年度の発掘調査は山辺中学校改築に伴う発掘調査と、横田下の丁の発掘調査との2箇所を行うこととした。どちらも多分に緊急発掘的意味がこめられているが、特に下の丁については、今まで発掘調査を続けていた惣社、伊和神社の北西500mあまりの位置にあり、その地が国府に関わる下の丁ではないかとの考えかたもあり、急速に宅地化が進行しているので、早急に調査が必要との見地に立って調査を行うこととした。また、この地点の北側住宅地内における下水道工事に際して、1.20mあまりの黒色粘土層より、弥生中期後半と思われる土器片がかなり採集されており、下の丁においても何らかの遺構の存在も想像された。このため、小範囲ではあるが部分的には地層確認の意味も含めて2m余りまで掘ったが、結果は現代と思われる暗渠排水溝にあたったのみで、他は遺物の散見のみであった。

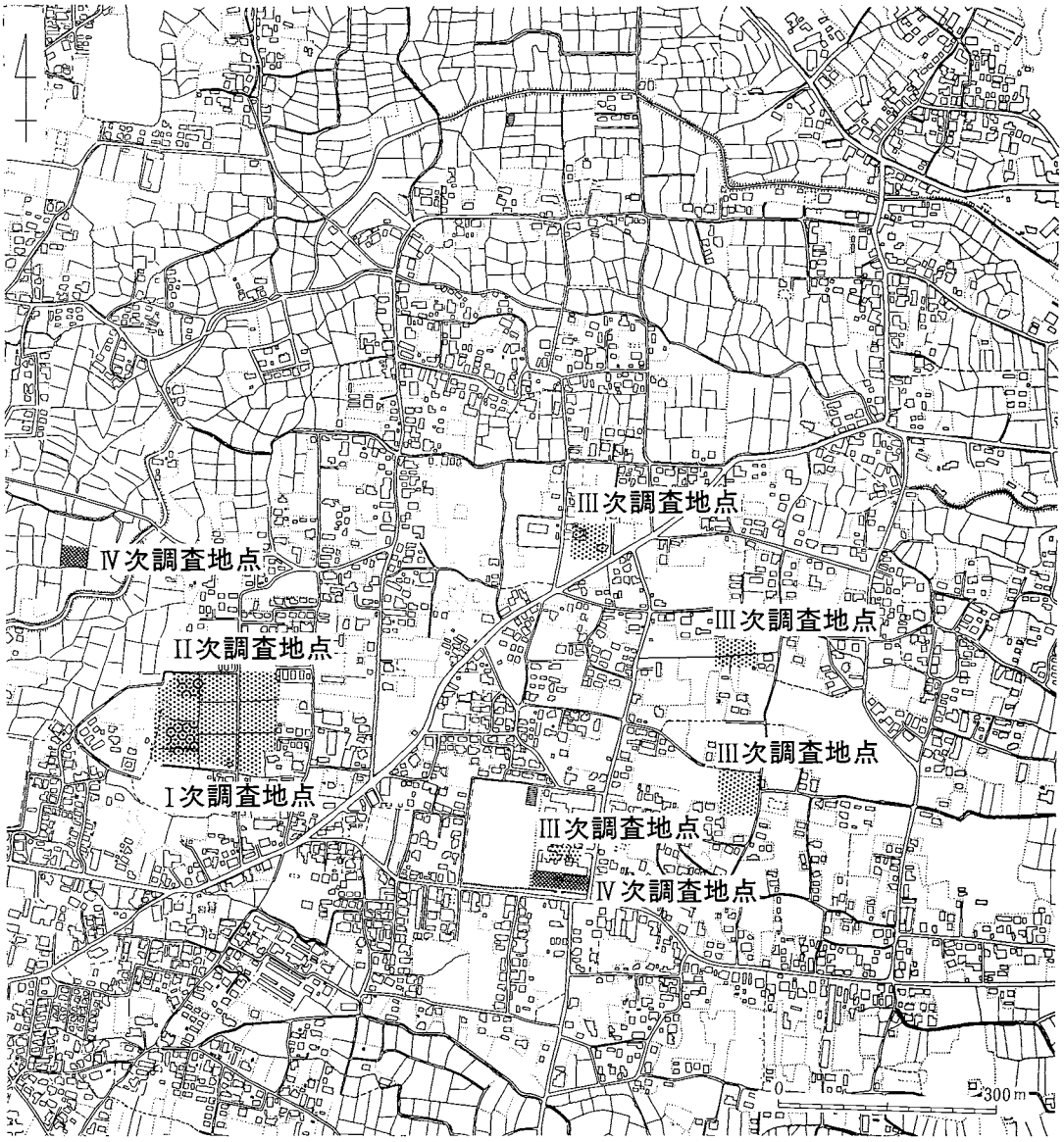
山辺中学校では、工事の基礎掘りに合わせて調査をしたが、同校生徒の授業の一環として発掘に参加してもらった。その結果古墳時代末と思われる住居跡の一部を検出した。

第2節　山辺中学校敷地（下原遺跡）

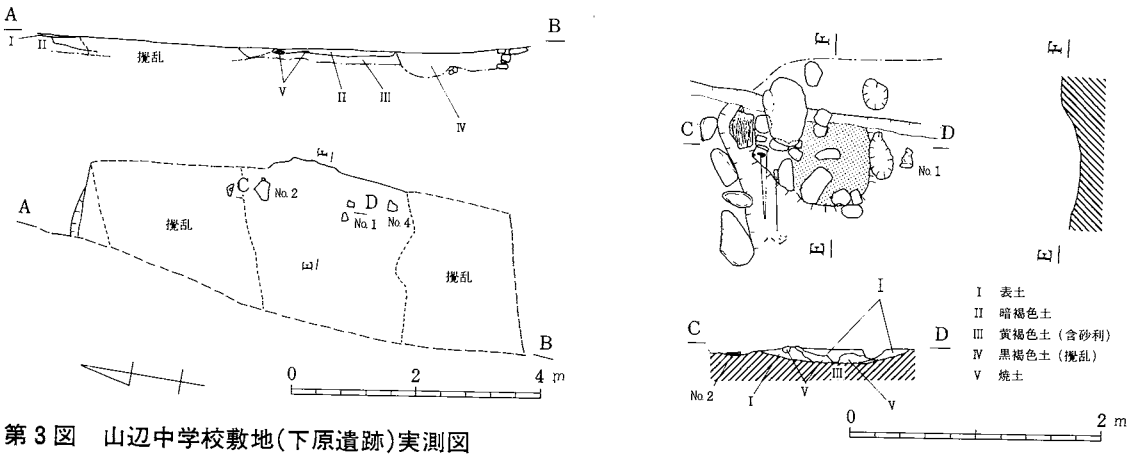
遺構　本年度工事は昨年発掘調査した位置の南北2箇所で行われることとなり、遺構の存在が推定される位置の表土を除土した。その結果、北側にはなにもなく、南側に2箇所で土器片の出土を見、そこを拡張して調査を行った。しかし、学校の敷地造成と校舎建築等で遺構は攪乱されており、その全容はわからなかった。

第1号住居址　調査地点の東端にあり、一部分に床面と焼土があり遺物の伴出もあったので、住居址としてあつかった。遺構は地表下30cm程の位置にあり、その規模、プランは不明である。第3図に示すごとく30cm大の礫があり、その下に焼土が70×70cm、厚さ10cmで広がっている。遺物は第6図、10の小形甕の他16の須恵器坏、27の大甕片などがあった。この焼土はカマドと思われ、それから推量するとこの住居址の東端部にあったのではないか。焼土の南北両側は攪乱をうけており、北端に僅かに壁面が検出されている。

第1号住居址より西側10mあまりの地点よりも遺物が出土したが、すでに水道管敷設により遺構は攪乱を受けており、住居址としてとらえることは出来なかったが、生活面であることは明らかで



第２図　第１次～第４次発掘調査地点



第3図　山辺中学校敷地(下原遺跡)実測図

ある。遺物出土の位置は地表下50cmあまりであり、結果的にはこの中学校を造る際に、高い方の東側をけずって西側に土を持って来ているようである。

遺物　図1～7は土師器甕の口縁部である。いずれも口縁内外はヨコナデをしてあるが、頸部以下では2.5cm巾のやや荒目のハケ状工具でタテに引いてある。7は広がる口縁で、内面にハケ状工具でひいてある。8・9は甕の底部で共に底は調整が粗く、粘土のノロがついている。8は木葉底とも見える。10は小形甕でタテにケズリを入れて調整した後、2.1cm巾のハケ状工具で胴部を調整している。ハケ目は胴部全面にあり、口縁と頸部はヨコナデをしている。内面も上部はハケ状工具でヨコナデをしてあり、更にタテに押さえた跡もあり、調整は悪い。特に底部は凹凸がある。器壁の内外面に炭化物の付着があり、底部断面には2次焼成がみえる。11も小形甕であるが胴部のハケ目が粗い。12も11に似てやや粗いハケ目であるが、殆ど10と同様のものである。13は底部であるが、外面は太く粗い平行沈線が一面につけられている。形態は不明である。

14～27は須恵器である。14・15は坏蓋である。ツマミは上面がやや窪み、上部はケズリがみられる。かえりはやや小さく胎土はやわらかい。15は外側に釉がつき、重ね焼きをしたらしい。16～23は坏で、16は高台付き坏で高台は付け高台、底部は右回転ロクロで調整している。腰の稜は強く、やや外開きに立ち上がる。内面は赤焼けである。17は外面赤焼けで身はやや内弯している。18は胎土、焼成の悪いもので、高台付き坏の底部の一部である。19は丸底気味の坏で、底はヘラ調整で磨いてある。内面半分には自然釉がかかっている。20も坏の底部でカマ印か太い円形の線が刻まれている。21は口辺部で内面に段がある。坏としてはやや深目のものと思われる。22は小破片であり、白色を帯びたものである。23は糸きり底の底部である。24は瓶の口辺部で口縁下に稜を持ち、内外に黒緑色の釉が着く。25は須恵器の壺胴部で外面にはタテの叩き目、内面は円形あて具を用いた後、

横に磨り消しているが、その仕方は雑である。26・27は大甕の破片でタタキ目からして別個体である。26は焼成が悪く、部分的に釉がカイラギ状になったり、断面に空洞があったりしている。27は格子目状のタタキ目を持ち、内面は押さえのあとが強く残り、また横に約1cm幅のハケ目状のものが何条かついている。これらはいずれも8世紀に属するものであろう。

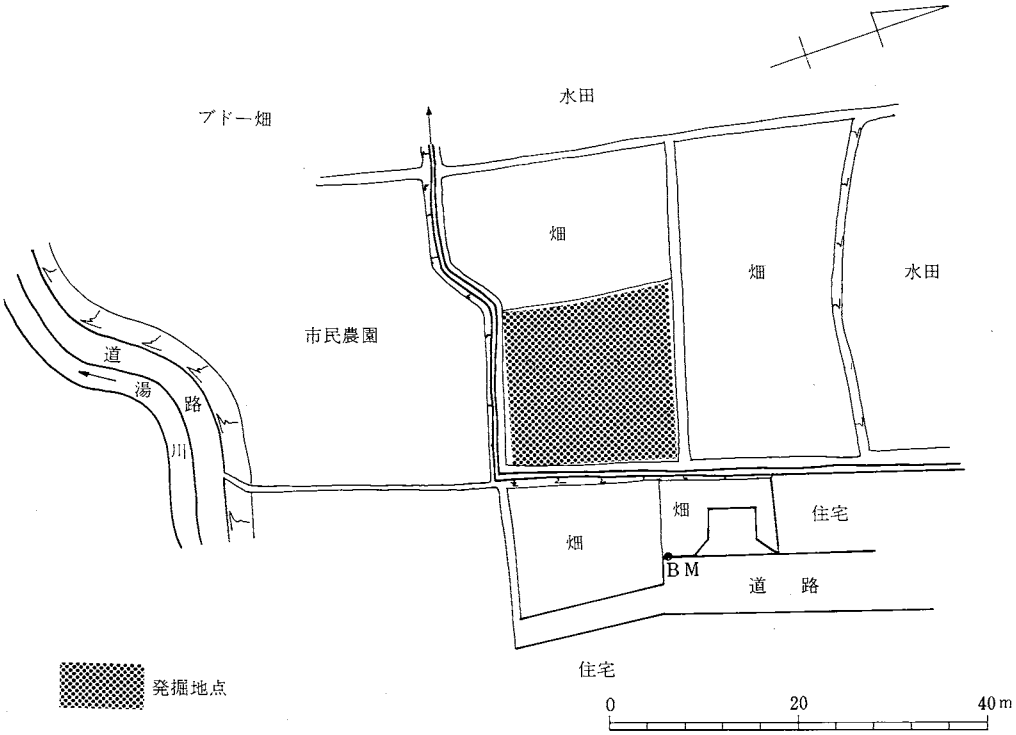
28・29は1住の西側地点で出土したもので、28は長胴の甕であり、底部は荒い調整でやや丸く、立てないものである。外面は5mmあまりの細い工具でタテナデをしている。内面はタテ、ナナメに調整しているが、これも粗雑である。外面は黒化している部分もある。29も甕の底である。これらは7世紀に属するものであろう。

第3節　下の丁地籍

遺構　本址は湯川の右岸の水田であるが、3×3mのグリットを20ヶ設定し、内14のグリットを掘った。遺構は18～20Gの間に瓦を使った暗渠排水溝が検出されたのみであるが、使用している瓦が昭和10年代のものであり、溝もその時代と思われる。しかし、部分的には流されたと思われる小さな土器片が10点程出土している。

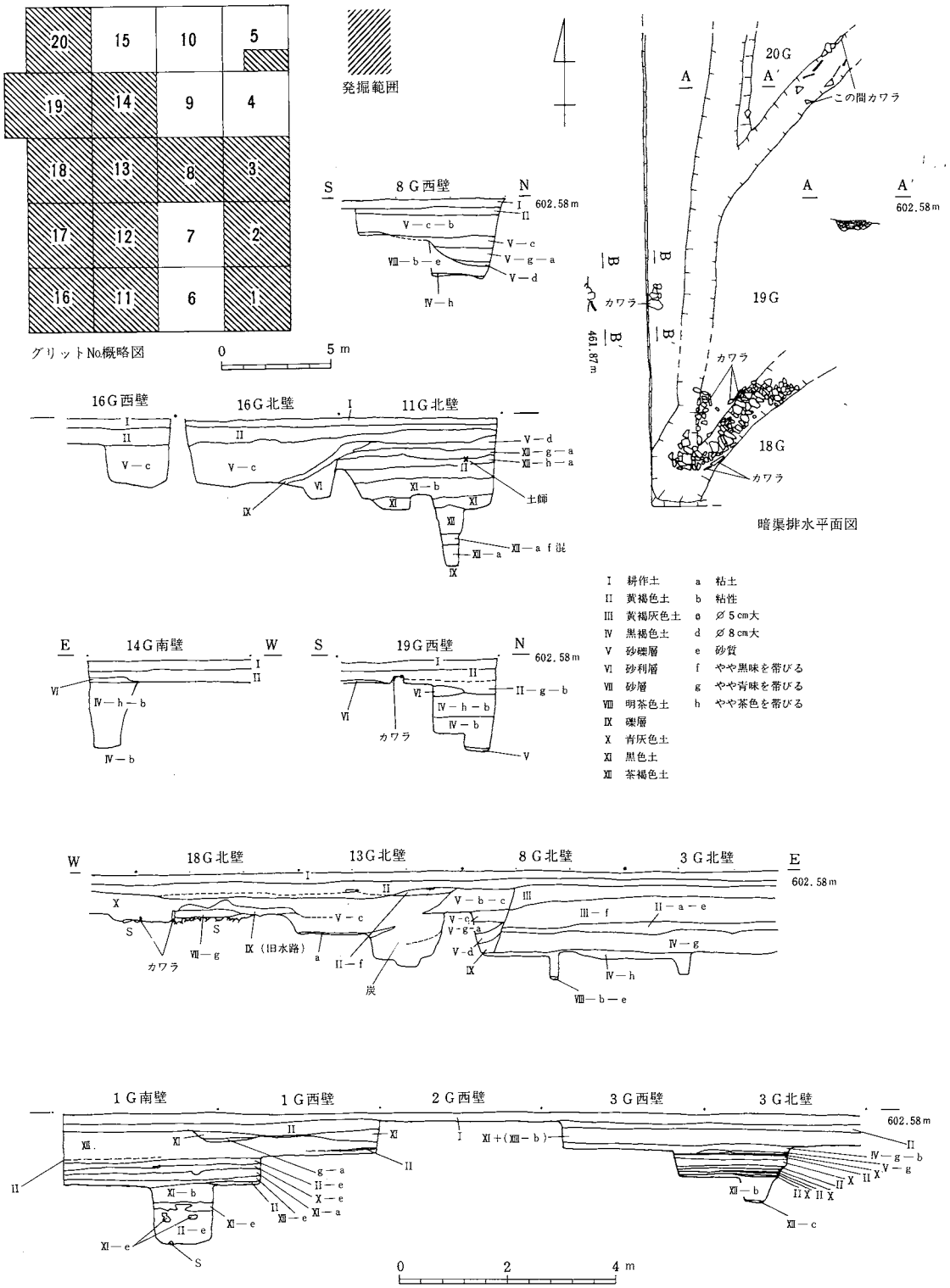
遺物　出土遺物の全体は時期的には平安時代より現代までに及んでいるが、ある程度形のわかるものは近世のものである。30は赤色の緻密な胎土の土師器の坏である。口径は不明だが、底径は4cmと小さく器厚が厚い。底部からやや直に立ったあと、急に広がっている。31は須恵器である。壺形かやや口頸部に近いらしい。32は須恵器のタタキ目のあるもので内面もヨコナデをしている。33は白瓷系ともおもわれる高台付坏の底部である。高台は付け高台、釉はなくロクロ調整がみえる。34は内耳鍋の底で平らで薄い。35は常滑の大甕の胴部破片である。胎土が粗く断面もハゼている。36は灰釉の皿で口唇は外反する。内外面貫入が多い。37は灰釉坏の小破片であり、38は白釉陶器であるが、強く弯曲している器形である。39は白磁片で内面に一本の沈線が走る。40～43は染付けで、40は内面草文、外面も蔓状の文様のついた皿で、42は染付け部分がわからないが、ゴスが口唇近くに小さく飛んでいる。43は伊万里系の皿か、草花文と外面蔓草文で、口唇に鉄釉がかかる。44は白磁であるが、外周と穴内部に釉がかかるもので、紡錘車に似ているが用途も不明である。45は鉄釉香炉の胴部である。内面はロクロによる調整痕があり、鉄釉を化粧掛している。46・47は鉄釉の灯明皿である。47はやや小振りである。48はすり鉢である。いずれも目の粗いものであるが、48・49はともに灰白色の胎土で軽い。50は外面がカイラギ状で胎土が重く固い。51は大甕の胴部である。内面は凹凸の強いもので、胎土は精選されている。34以下は中近世の土器、陶磁器で、36は美濃大ガマ期、40～43の染付けは18・19世紀のもの、45は瀬戸系、46～51の鉄釉は瀬戸系であろう。

52～55は銅・鉄製品で、52はかんざしで銅製である。先は多分耳かき状になっていたものと思われるが、一本の線を曲げて先端部を取り付けた程度の簡単な作りである。53・54はキセルである。

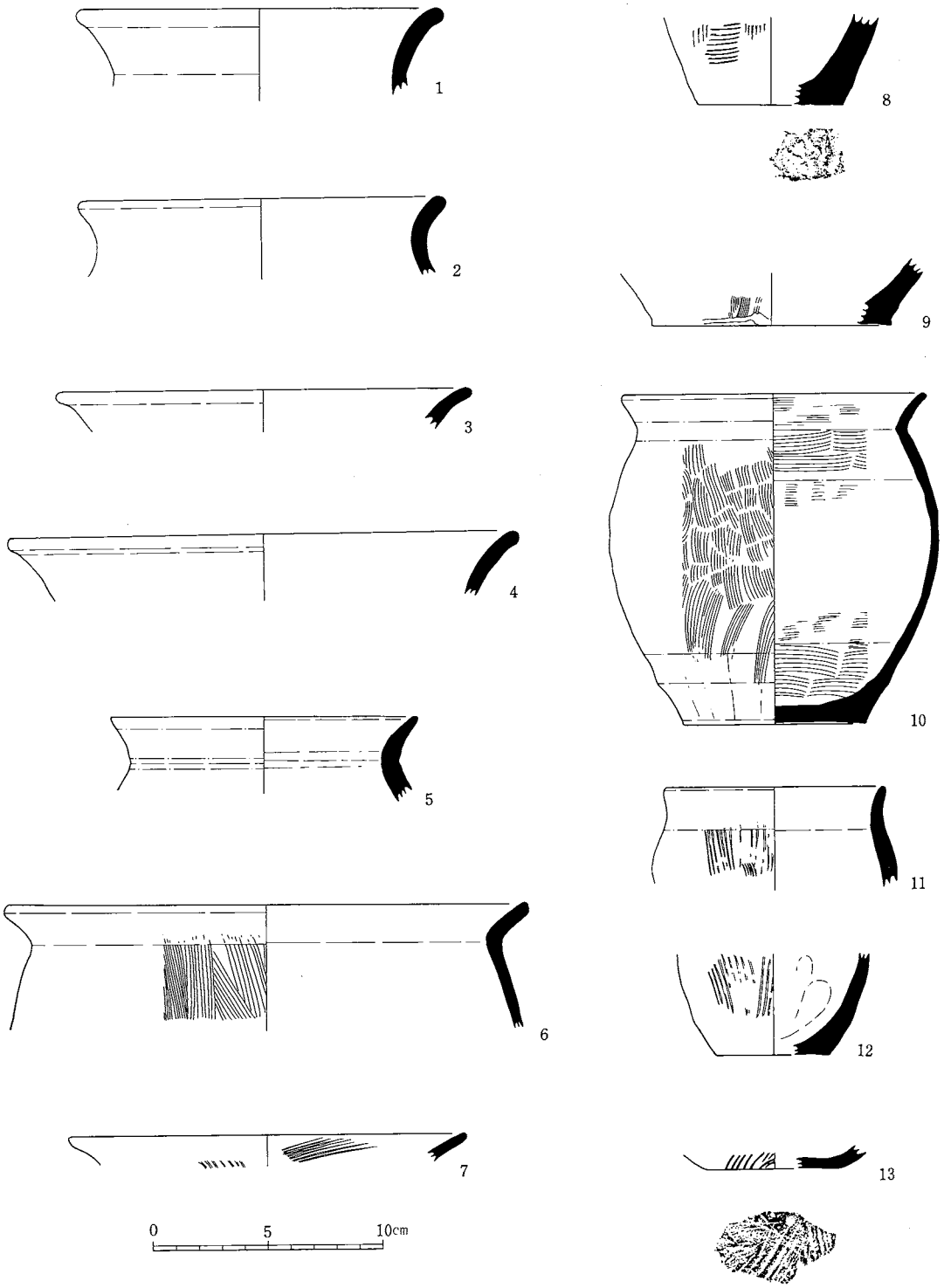


第4図　下の丁地籍周辺図

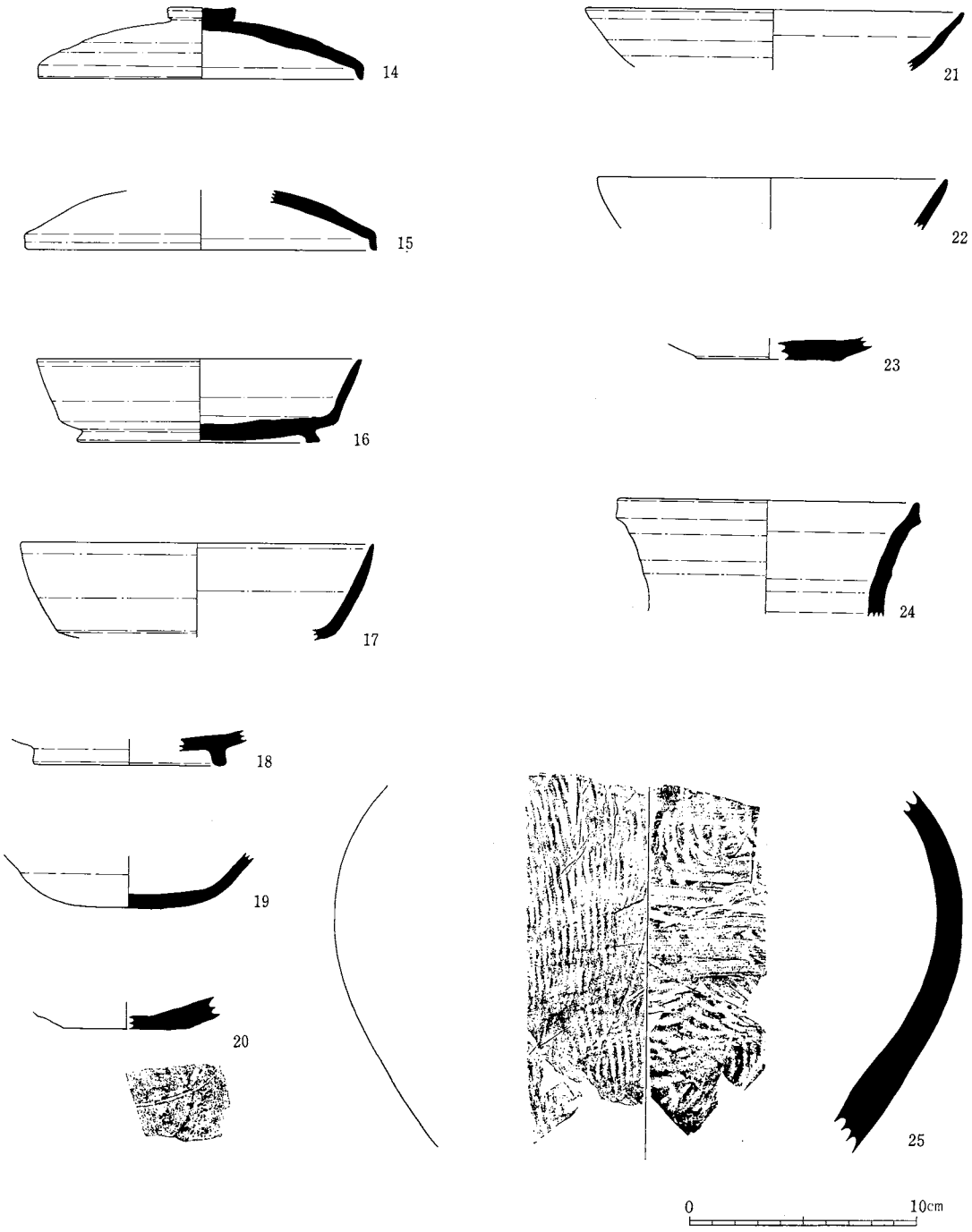
53は雁首で火皿が浅く、脂返しはない。54の吸口には肩があり、内部にはラウが残っている。55は釘状のものである。



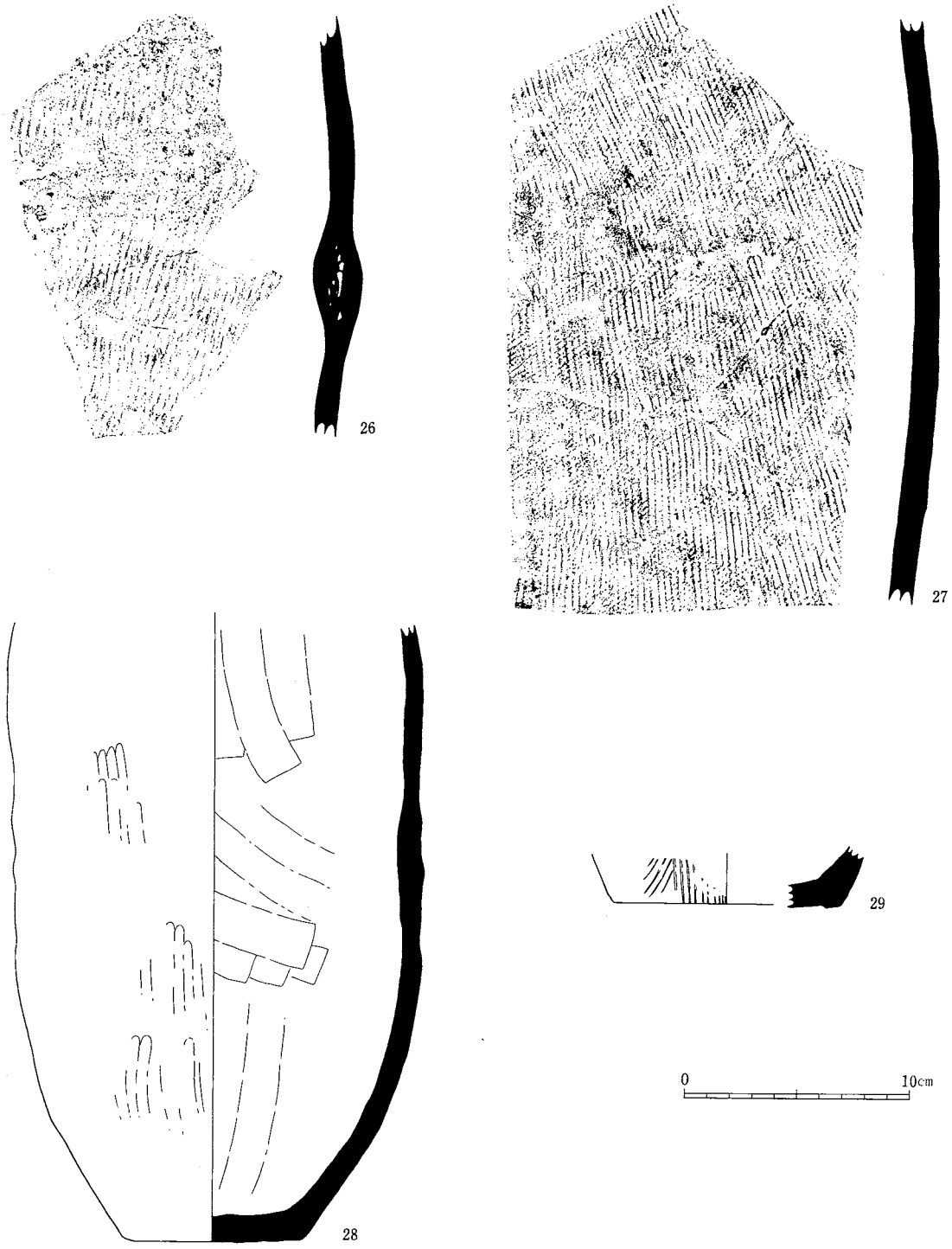
第5図　下の丁地籍平面・断面図



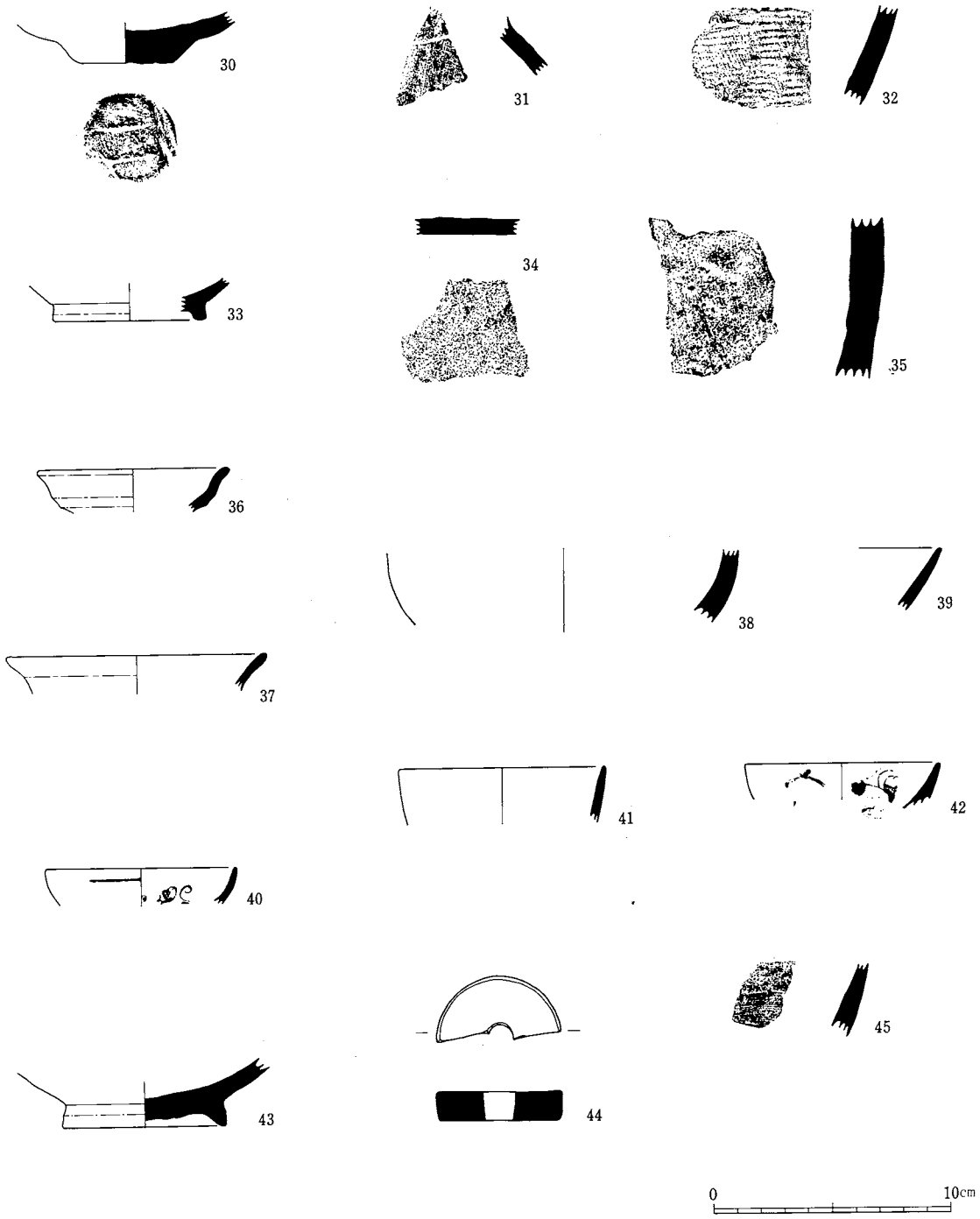
第6図　出土遺物(1)



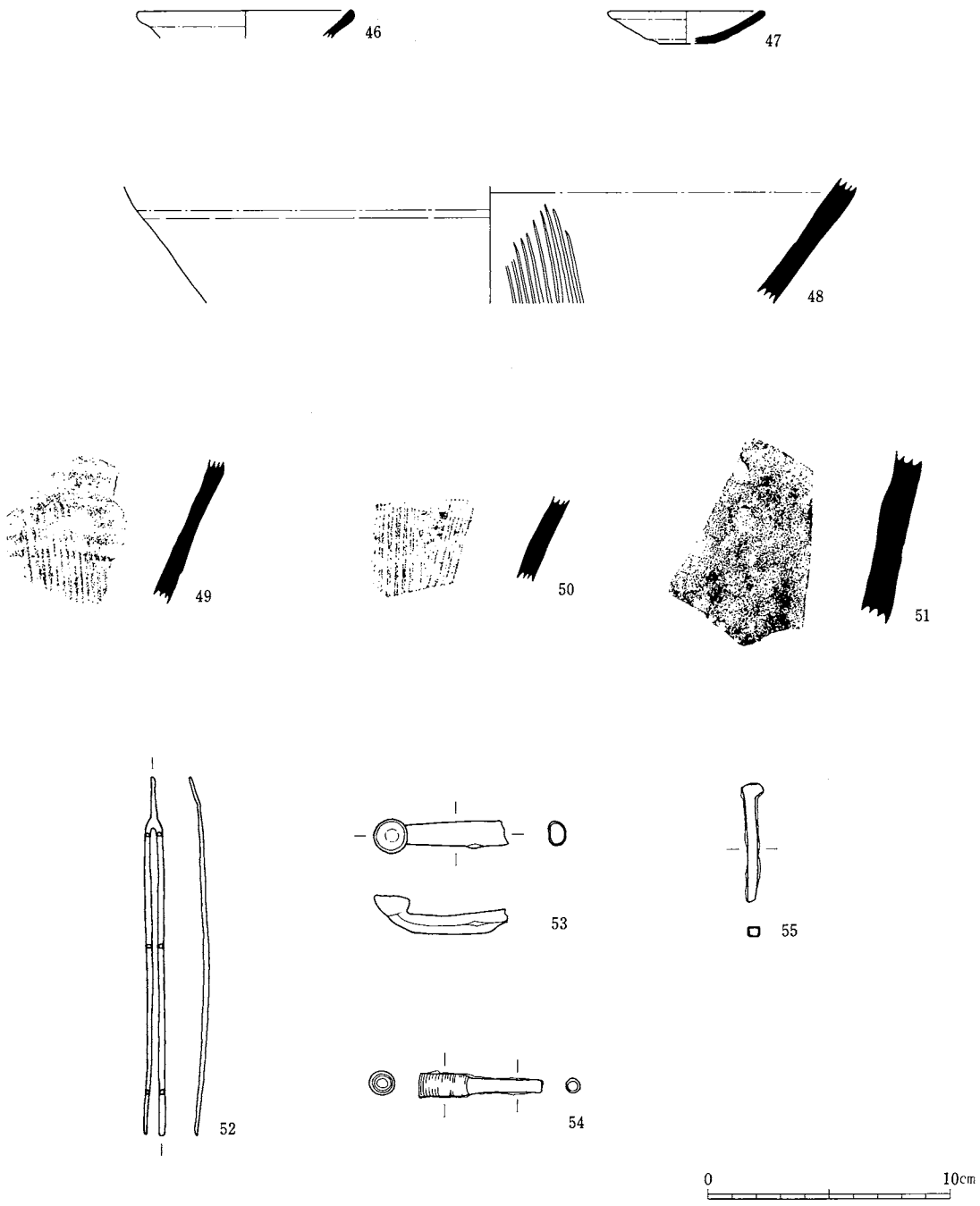
第７図　出土遺物(2)



第８図　出土遺物(3)



第９図　出土遺物(4)



第10図　出土遺物(5)

第4章　結び

推定信濃国府の発掘調査が始まってから4年になる。毎年それぞれの理由で地域を設定し、発掘調査、表面採集、地名調査を繰り返してきているが、その結果は残念ながら国府の片鱗もつかんでいない。国府所在地には諸説があり、第1次調査報告書でも調査団長の倉科明正氏が詳述している。

松本城国府説—現松本城周辺は大部分が泥層であって、住居地として利用される状態ではなかった。

大村のちょう国府説—ちょうの名は常福院と言う尼庵の智養比丘尼の名であり、ちょう屋敷は国府庁の遺名ではない。

筑摩国府説—筑摩の地は郡名の発祥地であって、筑摩周辺は国府跡と考えるよりも、筑摩郡家の所在地とおもわれる。

惣社国府説—故堀内千万蔵氏の論文、“惣社の地名・遺物からして有力候補地である”を紹介している。

これらの諸説をふまえ、第1次より第4次まで惣社を中心として調査を行ってきたが、更に調査・検討を重ねて行きたいし、国府調査でなくても機会あるごとに調査をしてゆくよう努めたい。ここで60年度の松本市教育委員会の調査結果の内、平安時代を中心とした遺構を列記すると下記のようになる。

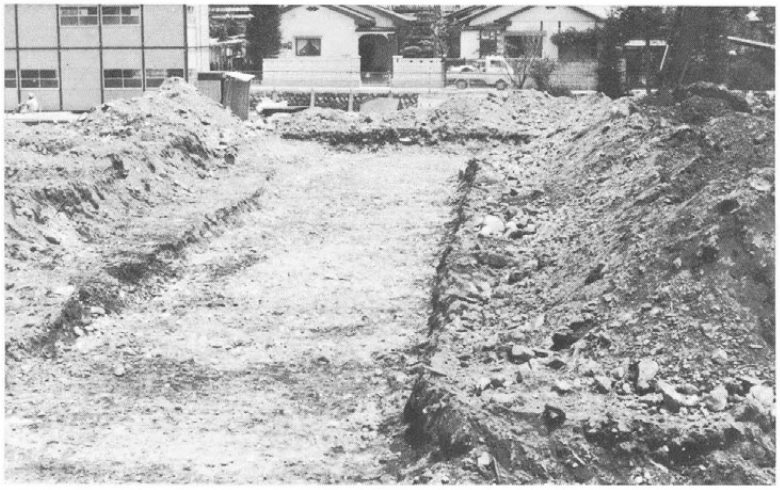
遺　跡　名	時　　代	遺　　構	遺　　物
1島立・南栗	古墳～中世	住居址18、建物址8他	土師器、須恵器、灰釉陶器、内耳土器、古銭他
2島立・北栗	奈良～平安	住居址41、建物址16	土師器、須恵器、灰釉陶器、布目瓦
3島立条里遺構	平安	溝4	〃　〃
4島立高綱中学校	〃	住居址2他	〃　〃
5神林・梶海渡	〃	〃　1、土坑1他	〃　〃　砥石他
6島内遺跡群	〃	〃　2、建物址2他	〃　〃
7岡田・西裏	〃	〃　1	〃　〃

1～6は松本市の西側、奈良井川左岸であり、特に島立地区においては本市の3年間に亘る調査の他、長野県埋蔵文化財センターの行っている中央道長野線建設に先立つ発掘調査の成果と合わせると数100軒からの住居址を検出している。一方国府説のある松本市街地の東側では、発掘面積の極少と言うこともあるが、数軒しか検出していない。

これらの結果が国府推定に直接かかわるとはおもわれないが、松本市内の全てを調査しつくせば何らかの答えが得られることと思われるので、核心をついた調査は勿論であるが、広範囲の調査も根気よく続ける必要があろう。

図　　版

1号住居址
調査風景

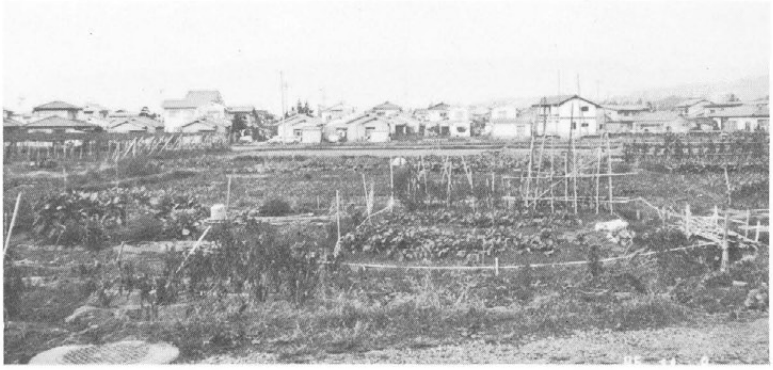


校舎基礎
掘削

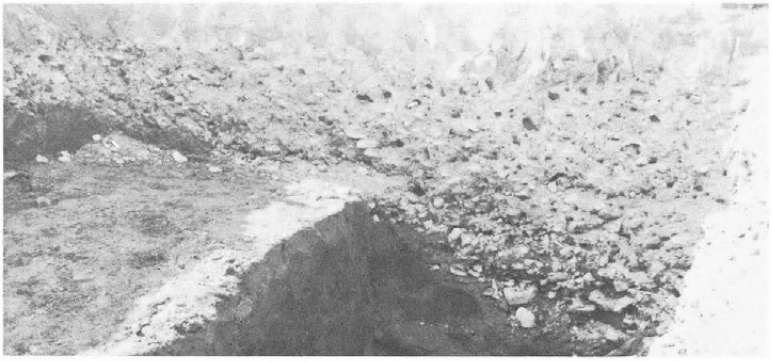
1号住居址
遺物(No.27)
出土状況

図版1　山辺中学校敷地(下原遺跡)

全景　西より



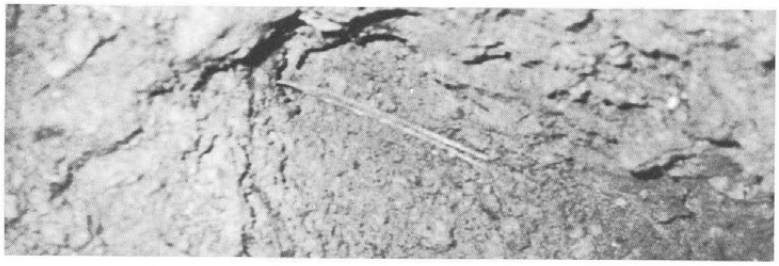
全景　東より



１Ｇ礫層

１Ｇ地層断面

図版２　下の丁地籍(1)



14Gかんざし
出土状況

調査状況

調査状況

調査状況

図版3　下の丁地籍(2)

暗渠排水溝

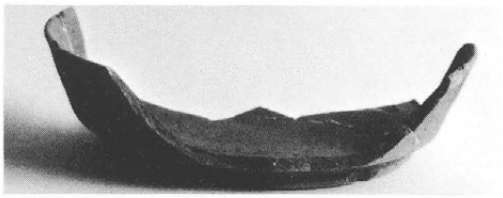
暗渠排水溝

記念撮影

埋土均し作業

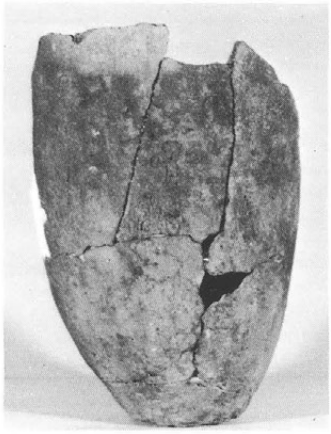
図版 4　下の丁地籍(3)

14

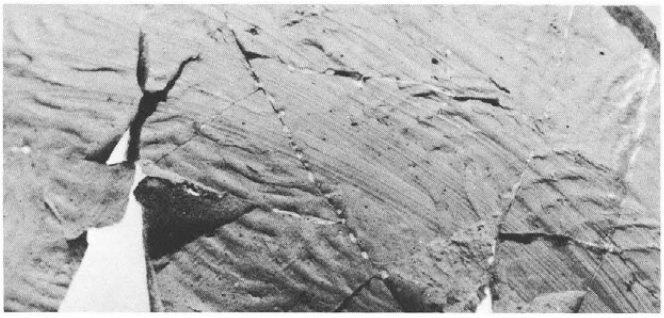


16

10



28



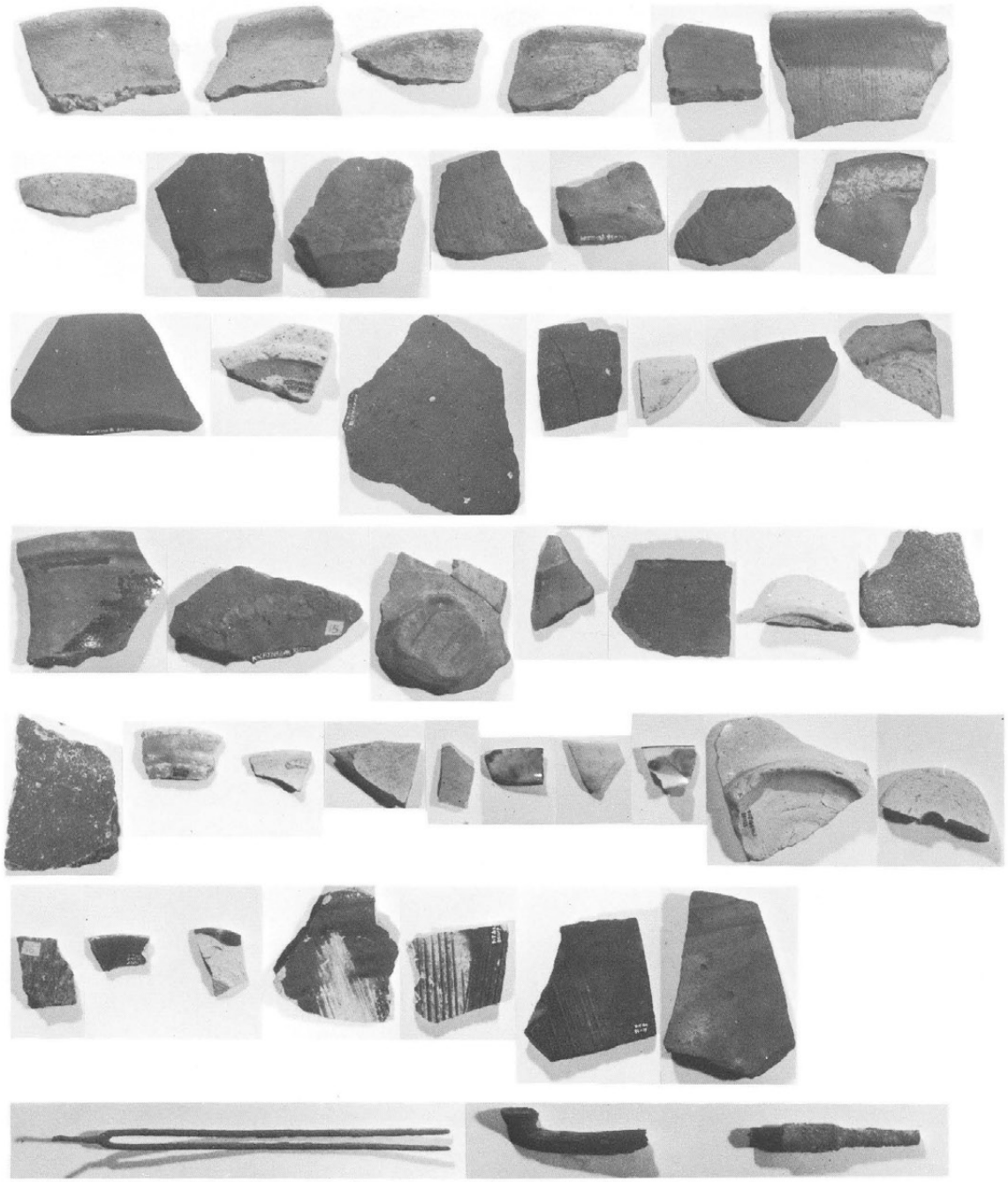
25内面

外面

26 内面

27

図版 5　出土遺物(1)（No.は挿図No.と同じ）



上より 1.　1～6　　2.　7～9.11～13.15　3.　17～23
4.　24.29～34　5.　35～44　　6.　45～51
7.　52～54

図版 6　出土遺物(2)（No.は挿図No.と同じ）

松本市文化財調査報告No.42

推定信濃国府Ⅳ

昭和61年3月20日　印刷
昭和61年3月29日　発行

発行　松本市教育委員会
印刷　アサカワ印刷㈱